

会 議 録

- 1 会 議 名 第 1 回北九州市次期教育プラン検討会議
- 2 会 議 種 別 市政運営上の会合
- 3 議 題 (1) 国及び北九州市の動向
(2) 次期「北九州市教育プラン」の考え方(案)
- 4 開 催 日 時 令和 5 年 12 月 12 日(火) 13 時 00 分~14 時 30 分
- 5 開 催 場 所 北九州市立商工貿易会館 2 階 多目的ホール
(北九州市小倉北区古船場町 1 番 35 号)
- 6 出 席 者 構成員 8 名、教育長、教育次長、事務局

7 会 議 経 過 (発 言 内 容)

(1) 開会及び教育長あいさつ

教育委員会を代表しまして、一言ご挨拶申し上げます。皆様におかれては、ご多忙の折、本会議の構成員をお引き受けいただき、誠にありがとうございます。

教育プランでございますが、これは、大学や企業でいう中期目標や中期計画のようなものです。教育施策を進めていくうえでの根幹となるもので、5年計画となっております。現在の教育プランは令和元年8月に策定し、今年度までとなっております。

5年前、現在の教育プランを策定したころから、コロナ禍をはさんで環境が激変しています。ハード面では、現在の教育プランを策定したころは、「できれば子どもたちに端末を準備して ICT 教育を進めたい」という理想を持っていましたが、コロナを契機に一人一台端末が整備され、子どもたちは端末を持ち帰ったりするというように、教育スタイルが激変しております。コロナ禍で変わったのは、子どもたちのタブレットの環境だけでなく、学校という場所がどれだけ子どもたちの居場所として大切かという、福祉的な要素があるということがあぶり出されたコロナ禍の3年間でした。

現状は、コロナ禍前では考えられないほど不登校の問題や、ヤングケアラーの問題など、福祉的側面が学校現場に現れています。そういう意味では、学校に求められるものが、この5年間で非常に膨らんだ、ということがございます。

このような中、国においては、今年の6月に教育振興基本計画を策定しております。

国の計画では、2040年以降の社会を見据えた持続可能な社会の担い手を育成していくそれと、日本社会に根差したウェルビーイングを向上させていくこの二つを柱に教育の根幹としています。

本市は今年度、新しい市長のもとで、北九州市そのもののビジョン、いわゆる基本構想・基本計画の策定作業が、現在進行しています。その中でも、教育は一つの大きな柱として検討されていますが、それと同時に、教育委員会として、来年度からの教育の計画をどういうふうに作っていくかと、いうことを検討しないといけない段階でありまして、この会議はそういったことをお話していただきたいと思っています。

教育でございますが、地球規模の課題が地域の課題、そして日常生活の課題に直結している状況でございます。グローバル化が進むということは、現行の教育プランの中でも言われておりますが、本当に身につまされるような現象が、毎日起こっています。

そういった状況の中で、2040年の社会を担っていく子どもたちが力強くしなやかに生きていき、なおかつその子どもたち、そして社会のウェルビーイングを実現するために、私たちは、これからどういう計画を作るかということ、教育の質を高めるという意味で検討してもらわないといけません。

そのために、今回の構成員の皆様方にご参加いただきました。どうぞ、構成員の皆様方の意見をいただきながら、こどもまんなか社会を実現するための、次期教育プランを策定していきたいと考えていますので、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

(2) 座長選出

「北九州市次期教育プラン検討会議開催要項」第4条の規定により、座長は眞鍋構成員が推薦され承認

(3) 座長あいさつ

ただいまご指名いただきました眞鍋でございます。なにぶん不慣れなもので、なかなか難しいなと思いつつも、精一杯務めさせていただきたいと思っています。

北九州の子どもたちのみならず、どちらかというところ世界中の子ども達となるんですかね。やはり教育というのは非常に重要なものだと思いますので、今日は様々な方面からのエキスパートの方にお集まりいただいているので、できるだけあまり形式ばらずに、率直な意見をたくさんいただきたいと思っています。

私自身も実は昨年から今年にかけて、1年間、イギリスの大学院に学生として留学して、サステナビリティを学んできました。その影響を受けている部分もありますので、そういったこともお話ができるタイミングがあれば、お話ししながら、いいプランができるように努めて参りたいと思います。

どうぞよろしくお願いいたします。

(4) 議題(1) 国及び北九州市の動向

栗原企画調整課長より説明（資料1）

丹羽計画調整担当部長より説明（資料2、資料3）

○ 宮口構成員

ちょっと不勉強で申し訳ないですが、この2040年以降という設定自体が、どのような背景から生まれてきたのか少し教えていただきたいと思います。

○ 丹羽計画調整担当部長

私も2040年というのが、何を起点として語られているのか把握できていないため、推察する言い方ですが、やはり社会の変革がある中で、今の時点から見据えて15年、20年ぐらいのスパンの社会変革をとらえながら、学校教育を担っていくというのが、当面の振興基本計画の実施にあたって重要であり、必要ではないかと思っています。それぐらいの社会スパンしかとらえられないので、それ以降さらに長いスパンになってしまうと、社会自体が変わってしまうので、教育振興基本計画のあり方自体も改めて考えないといけないためかと思っています。

○ 宮口構成員

ご説明いただいた通り、Society 5.0から6.0、もしかしたら10年～15年ぐらいのスパンで考えるということが、求められていると理解しました。

○ 下岡構成員

今回の議論にも関わるとは思いますが、ここで書かれているのは、教育と言っても民間や公教育もあれば、家庭の教育もある中で、公教育に限ったことをディスカッションして決めていく場なのか、それを全部包括したうえで、教育のあり方みたいな話なのか、どちらでしょうか。

○ 丹羽計画調整担当部長

基本的には学校教育をメインに考えていただければと思います。少しぼやけさせてしまって恐縮ですが、放課後や家庭教育のサポートがあって初めてその授業内容の深度や理解力があがる、ということにおいて言えば、補助的に、地域や連携部分、これはこの議論の中で話していただいてもいいかと思っています。

○ 上田構成員

ここに書かれていることは、すごく大切な事だと思いますが、知りたいのが、今までこの教育基本計画の前の段階の教育があって、それでよかったことと悪かったことがあって、その上で、これが成り立っているのではと思っています。それが今おっしゃるSociety 5.0だと思うんです。その前の段階の教育についてどのような評価があって、これが作られているのかということ、参考のためにお聞きしたいなと思います。

○ 眞鍋座長

これは今の教育振興基本計画がどういう背景でできたかということですね。

○ 丹羽計画調整担当部長

この教育振興基本計画を策定するにあたって作成された資料2の緑色部分に、教育の普遍的な使命ということで、教育基本法の理念や社会への対応を重要に行ってきました。不易流行という形で、こういった旧来の教育として重要な部分は生かしつつ、新しい社会にキャッチアップする部分として教育の見直しを行っていくということが、今回皆さんにご議論いただきたい部分となっております。

個別具体的に教育施策がどういう評価かというのは、本日資料等をご用意できてないので、個別にご説明の機会をいただければ、説明させていただきたいと思いません。

○ 田島教育長

資料3も見ていただいた方が分かりやすいと思います。1ページめくっていただいたところに、国の教育振興基本計画は、こういう趣旨で策定されているという説明がございます。今日の全体の流れは、おおもとの国の流れがあり、市の流れがあり、そういうものを総合的に斟酌しながら、今から作っていく教育プランを考えないといけないということです。その説明をするための最初の前提として、国の教育振興基本計画が今年6月にできたということをご説明しました。

出だしがこの1ページめくった左上のところにありますが、教育振興基本計画は、平成18年に法律改正されて、教育基本法ができています。この法律に基づいて、政府が作らないといけない計画という位置付けで、約5年ごとに作り上げられています。地方自治体にとっては、いわばこれが憲法のようなもので、地方自治体が計画を作る時には、国の基本計画を参考にしなさいという位置付けになっています。そのため、国の考え方がこうですということを、ざっくりとご説明させていただきました。

栗原企画調整課長より説明（資料4～資料9）

○ 鶴見構成員

資料4に第2期の教育プランがありますが、今回策定する教育プランは、この第2期教育プランのアクションにあたる程度はある程度決まっています、そこに我々の意見が反映される形で作り上げていくイメージでしょうか。それともこの項目自体もこれから作るものと理解してよろしいでしょうか

○ 栗原企画調整課長

現在こういった個別の計画がありますが、今からお話しいただく内容については、これにとらわれず、先ほど申した2040年を見据えながら、新しい北九州市の今後の教育のあり方をご検討いただければと考えております。

(5) 議題(2) 次期「北九州市教育プラン」の考え方(案)

栗原企画調整課長より説明（資料10）

○ 友納構成員

最初に確認ですが、この「ウェルビーイングの実現」は2040年ではなく、直近の教育基本計画の目標ではないでしょうか。2040年、17年後にウェルビーイングを実現するのかと勘違いしてしまうと思いました。令和6年度から10年度までにウェルビーイングを向上させたいのと、2040年は社会の作り手を育成したいと、分かれているのではないかと、文部科学省の計画を読んで気になりました。

もう一方で、北九州ならではについて、柱で取り組んだほうが良いと思うのは、私が就学相談会で、教育の現場の先生方の話を聞くと、皆さん、心理的安全性がとて高い先生で話しやすいです。保護者の方も「安心して話せました」と、満足度がとても高いです。これは北九州市の教育の現場のいいところだと思っています。これをこの資料に入れるとしたら、真ん中の「こどもの意見の尊重」と「こどもたちの違いへの理解」ということに尽きる。心理的安全性の言葉で表したらいいのか、もしかしたら安全安心な居場所のところに、心理的安全性を入れたらいいと思いました。

なぜなら、私は学校現場で、不登校等で苦しい思いをしている子どもたちに会いますが、彼女彼らにも言い分があるんです。まずそれをじっくり聞いてあげると、彼ら彼女たちは、わかってくれたと言って、自分で伸びていくんです。その間、私たちは、先生たちや保護者と話したりして環境調整をしていきますが、「安心して子どもが話せる」というところを盛り上げていけば、ウェルビーイングは向上するだろうと常々思っています。中にはSOSを出せない子どももたくさんいます。固まったり、泣いてしまったり、暴れてしまったり、そのサインを私たちが見つけて、言語化できない子どもたちの苦しいところをどうやってキャッチするか。そういうところがあれば、ウェルビーイングは上がると思っています。

○ 栗原企画調整課長

ウェルビーイングについてご説明したいと思います。

この2040年にウェルビーイングの実現と書いているのは、今の子どもたちが大人になったときが2040年ごろですので、大人になった時点で、自分たちのウェルビーイングを実現できている大人になっていて欲しい、それが社会のウェルビーイングに繋がる、そうした思いを込めて書いているところです。

2040年というのが、今の子どもたちが大人になった時を指すのか、或いは2040年の学校を指すのか、おそらく二つの考え方があると思いますが、今のこの図では、2040年の学校の姿ではなく、今の子どもたちが大人になった姿を想像して、そこに向かって子どもたちが進んでいけるように我々として支えていきたいという、そうした絵になっています。

○ 宮口構成員

私が日頃から気になっていることがあります。挑戦するというのは非常に大事な視点ですが、その前提として、安全で安心していることがとても大事で、そうでなければチャレンジできませんし、安心していないとチャレンジできない前提があります。

ここに、安全と安心は一緒に書かれていますが、最近の考え方としては、この安全と安心は分けて考えるべきだろうという考え方があります。というのも、安全は、誰が決めるのかという観点があります。安全の合意形成は、これぐらいやったら安全だろう、という視点を持っていたとしても、人によってはそれでは足りないなど、安全に対する考え方はさまざまであり、合意形成が非常に重要な観点の一つになるかと思えます。これを踏まえると、子どもたちがどのように安全を感じるかという合意形成に子どもの視点を入れていくべきと思えます。そうすると、合意形成の中で安心に繋がってくるだろうということです。本当に安全・安心なものを作ってしまうと、危険な事に対応しなくなってしまう、そういう考え方もあります。逆に言えば、危険・不安という状況は改善をしなければいけないですが、やはり子どもたちが何に対して不安に思っているか。安全対策を考えていくと、そういう視点が大事ではないか。不安に思っていることとか、怖い場所があるとかそういうことでもいいと思えますが、子どもたちにしっかりとそういったところを聞いてあげる。これだけすれば安心だろうという大人の視点だけではなく、子どもの視点を取り入れていくことが大事ではないかと思いました。

安全安心な居場所というワードとしてはいいと思えますが、一緒に使っていくという前提としては分けて考えていくことが必要じゃないかと思えます。

○ 栗原企画調整課長

安全と安心を分ける、そして子どもの視点を入れるべきというご指摘を踏まえ、今後どういう形で、プランの中に表記していくか考えて参りたいと思えます。また、子どもの視点を入れるという点では、来月にアンケートを行う予定でございまして、子どもたちの負担を考えると多くの質問はできないですが、その中でまた今のご意見を踏まえて考えていきたいと思えます。

○ 眞鍋座長

全く素人的な質問ですが、物理的なものから来る安全性と、安心に近いのかもしれませんが、対人関係とかの物理的ではないものから来る心理的な安全性みたいなものがある中で両方向の確認をすることが大事だということですね。

○ 宮口構成員

定義になると、感覚的に遠くなりますが、眞鍋座長がおっしゃったように、文部科学省のホームページでも安全と安心を分けて表現していきたいと言っていることをふまえながら、プランを作っていく事が必要ではないかと思えます。

○ 窪田構成員

国の教育振興基本計画に書かれていることですが懸念する点があるので発言したいと思いました。日本社会に根差したウェルビーイングというところで、協調的な要素と、獲得的な要素、自己肯定感とか自己実現というものと、協働性とか利他性とかそういうものを調和させるっていうことが強調されていますが、対等に並べるよりも、自己を肯定して自己を受容してこそ他者との協働だったりしますこう入ることで、よく日本社会は集団を重視する、欧米は個を重視すると言われますが、集団の中で他者の意向を気にするいわゆる忖度ですね。自分らしく生きられずに、非常に生きづらさを感じている子どもであったり、大人の社会でも意見表明ができないとか、昨今話題になっているハラスメントとか性加害とか、不正を見過ごすとか、その集団に埋没することのネガティブな側面があるわけですけど、ここで調和と協調というふうに、ちょっと協調の方が強調される形になると、子どもの意見を尊重する時に、子どもは非常に大人に忖度しますから、そういうところでもかなり注意深く使わないと、危険なのではないかと思いました。大人が徹底的に、子どもに何の懸念も与えずに、子どもの意見を聞く姿勢を持つ必要があって、そういう時に日本型とか、調和とか強調されるのがちょっと危険じゃないかと思いました。

○ 眞鍋座長

協調が強調されすぎるとよろしくないというご意見と思います。

私も同感で、最近特にアントレプレナー教育をしていこうというときに、忖度しすぎると、やりたいこともできないところが出てくる可能性もあるなと思っています。

個人的に下岡構成員に聞きたいのですが、何かを成し遂げていこうという時には多分、協調をあまり考えずに、何か一点突破していくような力も必要ではないかと私は思うのですが、いかがでしょうか。

○ 下岡構成員

もともと僕も最初は外資の会社から始まったので、どちらかというところ、そこで衝撃が大きかった。個を重んじるとか、個を活かすというところですが、我々はベンチャーで新しいことやっていますが、一概に協調がないかというところ、むしろあるかと思っていて、発想としては新しいことをやるんですが、それを実社会に実装していくケースで、協調が求められる。よくスタートアップというところ、孫さん、スティーブ・ジョブズみたいなすごく個が強い人が出てきますけど、それはまれなケースなので、僕は、協調性はすごく重要だと思っている部分もあります。

先ほどの安心・安全の話に近いですが、自分が違う意見を言えるのは、戻ってこられる安心感があったり、その場で言えるという安心感があるということがセットであるようなものなので、個人が協調性なく強くて個を活かすというより、場とセットであるようなものだと思いますし、ベンチャー企業でもそういった環境なので、協調性は非常に重要だと思います。

○ 鶴見構成員

私はずっと高専で、ロボコンなどで学生と関わってきました。ロボコンに学生が

出場していろいろなドラマがありますが、その時にピット裏、いわゆるロボコンの表舞台ではなく、裏側を本当は皆さんに見て欲しい。そこでどんなことを彼らがやっているか。実は、問題と修正を繰り返しやっていて、本番に臨んで失敗して、その中でもいろいろな課題が出てくる。表舞台に立っているのは3人でも、実際には10人以上の学生たちが一緒に協働して、問題が起きたときに、協力し合って、それを解決していくプロセス。これがまさしくロボコンの裏側の舞台です。

スタートアップとも関係がありますが、我々が挑戦を応援しようとしたときに、どうしても頑張れよ、ちゃんとやればいい、と帰結してしましますが、実はそうではなくて、失敗する場を提供する。本当に大事な教育の場は安心・安全というのはそこだと思います。チャレンジをするということ、単にチャレンジするだけではなくて、その環境・場を提供、作っていくことが一番大事ではないかと、私は今までの経験から実感しています。その中で、学生たち、子どもたちが協調性、それから、コミュニケーションといったものを培っていくと思っています。

○ 眞鍋座長

失敗する場、失敗していいんだという場でなければならない。私もそうだと思いますが、逆に言うと今は違うのでしょうか。事務局のみなさんどうですか。失敗したら許されないみたいな雰囲気があるのでしょうか。

○ 高橋教育次長

学校は基本的に失敗するところで、失敗を通して学びを深めていくという前提はありますが、やはり、日本の学校教育の問題点の一つに、同調性を求めてくる集団になってしまいがちというところがあります。そこをどうやって解決していくか、ずっと課題であったと考えています。

ただ、昨今の子どもたちの様子を見ていると、単純に同調性を求めて、みんなと同じならいいというところから、一人一人が大事だという方向に、随分価値観がシフトしてきている気がします。一方で、中学生や高校生になると、ネットやSNS上では非常に同調性を強いられている感覚があったり、例えばLINEでも、既読がつかなかっただけで疎外される恐怖を感じているとか、子どもたちの心の脆さみたいなものは合わせてあります。

そういうところを、一つずつ解決していく必要があると考えています。

○ 眞鍋座長

私も普段、大学生と接していますが、同じように感じます。少しでも飛び抜けない感情があるというか、おとなしくしたいというか、ちょっと飛び抜けると、友達に悪いとか、そう考えてしまう傾向があるので、どうしたものかなと思ったので質問させていただきました。

○ 下岡構成員

教育ってすごく広いワードで、対象となる人も、学問であったりスポーツであったり芸術であったりすれば、上下という言い方で恐縮ですが、トップラインをどう

グローバルにもっていくのかということ、下をどう上げていくかという、いろんなターゲット、ターゲットという言い方がビジネスですが、対象があって、それをすべて網羅的にやろうと思うと、一人一人に合わせた形になってよくわからなくなると思っています。

企業の場合、中期経営計画が大綱だとすると、プランはどちらかと戦略だと考えると、やらないことを決めるといいますか、どこを重点的にやって、何をやらないのかということを決めていくことだと思うんですけど、いろんな分野がある中で、北九州はここにフォーカスしていこうというところをはっきり決めたいほうがわかりやすいし、逆に言うと決めないと、すごく総花的になるので、何をしようとしているか、よくわからなくなるなと思っています。非常に重要であり、ぜひそこを重点的に考慮した上で作っていただきたいなと思っていますが、皆さんはどうお考えなのか、お聞きしたいです。

○ 上田構成員

企業の立場から、北九州の教育に対してどういうことが言いたいかというと、私どもの会社は、5年前に本社を東京から北九州に移転しました。本社を移転するということは、当然従業員も東京から北九州に移動することになる。これがなかなか実現しない。従業員は単身赴任で来ますが、家族共にとったときに、一番ネックになるのが教育です。教育を預かっているのは、今の社会では主婦の方になっていきますから、特に東京から、子どもを地方に行かせるということに対して、非常にハンディキャップを負う感覚になる。これも事実としてあって、従って父はずっと単身赴任で過ごさないといけない。

下岡構成員がおっしゃったことを合わせると、私たちは、総花的な教育ではなくて、北九州だからこそ、こういう教育が受けられる、というようなアクセントのついたものであって欲しいと思っているので、今の下岡構成員の意見に対して非常に賛成をしています。

○ 栗原企画調整課長

教育は非常に対象が広いので、取組みも多く総花的になりがちだというところですが、確におっしゃる通りで、特に行政が作る教育プランとなりますと、どうしても対象であったり、取組みであったり、幅広く扱っていかないといけないというところで、誰ひとり取り残さないというところに繋がるのかもしれませんが、全方位的に触れざるをえない側面があると思います。

その中でも、何に重点的に取り組んでいくのかということは、しっかり示したいと思っておりますし、この資料10にも書いてあるキーワードをいかにわかりやすく伝えていくかというところが、今現在想定している方向性というところで考えている次第です。

もう一つ、上田構成員からいただいた、北九州ならではの、北九州ならこういう教育が受けられるという、そういうものがあつたほうがいいというご指摘でございませ

た。その視点も踏まえてプランを考えていきたいと思いますし、実際に今進んでいる新ビジョンでもそうした視点が重要だといわれていますので、我々としても、これを意識しながら、公教育というのがどうあるべきか、このプランを作りながら考えていきたいと思います。

○ 田島教育長

現在の教育プランがビジョン・ミッション・アクションでできていて、どの部分をこの場で審議するのかというお尋ねがありました。現在ここでたたき台はお示していますが、それこそビジョンから作り上げる段階であります。正直、確かに今の教育プランは、公教育である以上、どうしても行政が全方位的にやらざるをえないもので、総花的な書き方になっているのは事実です。次のいわゆるビジョンやミッションを考えるときに、今回の構成員のメンバーもその意図でお願い差し上げたのですが、北九州ならではの、アクセントをつけるという意味では、非常に重要なポイントを今お示しいただいたと思いますので、公教育で担わなきゃいけない部分がありながらも、北九州ならではのアクセント、それはぜひ考えていきたいと思っています。

○ 下岡構成員

これはお願いですが、総花的になるというのは理解できますが、今回の教育のテーマは、失敗を恐れず挑戦する、ということ、子どもを中心に書こうとしているということだと思います。おそらく総花的になってしまうというのは、スタンスが取りづらいい。要は、ここをこうするとか、こうするっていうのは言いにくい。なぜならば、それをやった時にそうではない人たちとか、いろいろなところから、ここはどうするんだという指摘が入る。それをなるべく起こさないようにするためには確かに総花的にやるのがいいですが、やはり結果が出るということは、スタンスを取りフォーカスすることだと思っているので、北九州市としてどうありたいかという議論は、やはりスタンスを取るべきだと思っています。

そうすると、事務局の皆さんは、いろいろなところからいろいろなことを言われると思いますが、それこそ、そう言われてもやるということが、挑戦することであり、失敗を恐れないということなのかなと思っています。まずは大人である我々からそれをできるということが重要ではないかと思っています。

○ 眞鍋座長

私は別の観点から、エッジをつけることが重要だと思うのは、最初にこのプランを見たときに、先生はスーパーマンかと思いました。こんなこと全部できるわけないと思いました。大学でもそうですが、ある程度絞っていくことの重要性というのは、先生のウェルビーイングに対して非常に重要ではないかと思っています。大学でもあれやこれやで事務仕事があって、休憩の時間が全然取れないとか、学生に向き合う時間が全然取れないという事態に、私も直面しています。

多分、小中高の先生も近しい状況なのかもしれないと想像します。ですから、北

九州ならではの視点ということもありますが、私は先生のウェルビーイング、自分たちがこれに向かって仕事をすればいいんだというミッションのようなものが、はっきりわかるような状況にするためにも、絞り込んだほうがいいというか、わかりやすいようにしたほうがいいと思います。

○ 泉構成員

北九州ならではの視点で、少し感じたところをお話しします。これまで環境教育やSDGsの取り組みに携わってきた経験から、畑や森やごみ問題といった豊富な実体験ができる場があるということが、北九州の強みだと思っています。

直近の点検評価アンケートから、子どもの実体験が減っていることに、てこ入れの必要性を感じました。これまで議論のあった、じっくり話を聞くという姿勢、そして安心・安全を子どもが感じられる実体験が豊富にある北九州市の強みに加えて、子どもが自分軸を整えられる、新しい教育プランの何か視点として、きらりと光るものがあれば良いと思います。

大学生のキャリア支援をしていて感じるところで、自ら成長する機会が欲しいという意欲がある一方で、例えば偶発的な経験から、自分の経験を横軸として貫いているものが何かを言語化することは、大学生でもまだまだ必要と感じています。小さいうちから安心して自分のことを語ることができる、そういった経験ができる場が、このポンチ絵に見えてくると、新しい教育プランを皆さんで作っていけると思います。

○ 眞鍋座長

教室に閉じた学びではなく、いろいろ地域に入りながら、社会の中で学んでいくという、いわゆる経験学習ですね。それを言語化できる能力はとても重要だと思います。

この教育振興基本計画でも、ESDがしっかり書かれていますので、そういったところも北九州は非常に盛んだと思いますので、ヒントになるのかもしれないと思います。

○ 窪田構成員

少し重なるところもありますが、今回、子どもの意見をしっかり聞いていくことが強調されていて、その具体的な手だてを、プランの中で実現していくことで、日本の子どもたちの自尊感情の低さとか、幸福感の低さが非常に話題になっているところで、そのあたりを、北九州市は実は、子どもつながりプログラムという心の育成のプログラムを持っていますので、そういうものを、他領域との関連も含めて、自分のいいところに気づいたり表現したりする力を育てて、どんな状況でも、きちんと他者と協働できるような力を育てるということが北九州市は突出してやれていると思います。いろんな領域に交友可能な力を徹底して育てるというところを強調するのも一つの焦点化の形ではないかなと思っています。

○ 眞鍋座長

北九州市の先駆的な取組や制度も活かしていきたい、ということですね。

○ 上田構成員

国の教育振興基本計画の中でも、地域は非常にクローズアップされているのが特徴ではないかと思っています、そうありたいと思います。北九州という地域、これをどう発展させていくか、というところに、教育は大いに関係していると思います。その中で、やはりシビックプライド、地元愛という観点。これを、ぜひ子どもに理解をして学んでいただいて、心の中にそれを持ってもらって、育てていきたいと思っています。

これなぜかって、北九州市民は、あまり北九州を自慢しないんです。タクシーに乗ってもタクシーの運転手さんが、あまり自慢しない。むしろ悪口は言ってるけど、商店街でも、あんまり北九州のことを言わない。ある時松本市に行ったときに、タクシーに乗ると、タクシーの運転手さんが「どこ行きましたか？ここいいですよ」とPRをする。商店街に入ると、店員さんが「この町はいいですよ」と。そういうムードというか、風土というか、そういうものが欠落しているのではないかという気がしています。

非常に残念だと思ったのは、教育大綱のアンケートで、「北九州で働きたい、活躍したい」というのが、子どもも保護者も最下位に近い。これは、市政もそうですし、教育もそうですが、地元に対する愛着というのがあるって初めて日本という国が始まるし世界が始まると私は思っているんで、教育現場だけではなく、市民全体かもしれないが、そういったものも植えつけていただいて、2040年に育てていった時に、北九州はいいまちだよと言えるような大人に育てて欲しい。これは希望ですね。

○ 眞鍋座長

私も全く同感です。先ほど泉委員が言われたように、その地域の中で、子どもたちが学ぶということが促進されれば、シビックプライドも少しずつ醸成されてくるのではないかと思います。

学校は学校、地域は地域というように、意外に地域と学校が隔絶されていますので、最近は大分融合進んできていると思いますが、そこがもう少しリンクするように一体化していけば、その辺も変わってくるのかと考えます。

8 問い合わせ先

教育委員会総務部企画調整課

電話番号 093-582-2357